



卓 話



「対人地雷除去活動について」

国際ロータリー第2580地区
対人地雷除去に関する特別委員会
常任委員 村瀬泰雄氏

ご紹介いただきました村瀬でございます。

私は卓話はうまくありませんが、地区のカンボジアの地雷除去活動にご理解をいただくため一生懸命やらせていただきます。30分間ご辛抱をお願いいたします。70半ばにも近くなりますとお話をしようと思ったことの半分は言い忘れますので、恐縮ながらメモを持たせていただきます。



2580地区の地雷除去活動はクリアランドプロジェクトとしてカンボジアで除去活動を開始してから丸6年、準備期間を入れると8年になりますのでよくご存知の方もおられますが、新しい方もおられるので簡単にその具体的中身を含めてお話をさせていただきたく存じます。

私が地雷に足を突っ込んだのは丸5年前の地区国際奉仕委員になり、現地視察に参加してからであります。それから毎年参加して今年は4度目の訪問をしてまいりました。

この地雷除去活動はもともと東京ロータリーが始めたもので、それがこういう大事なことは地区全体でやろうということになって、ガバナー直属の特別委員会が出来、現在のクリアランドプロジェクトになったわけです。現在は2580地区以外の地区も徐々に参加されており、2004年の大阪世界大会ではブースを作りPRしましたところ、外国のクラブ（アメリカ、カナダ、オーストラリア等）からも参加させてほしいと小切手を送ってくれるようになりました。また2004年11月の沖縄地区大会では元RI会長のビチャイ ラタクルさんがRI会長の代理として出席され、「ロータリーの原点に帰ろう」という公式スピーチで、あれだけ強く、繰り返し2580地区の「クリアランドプロジェクト」をロータリーに最もふさわしい奉仕活動だと支持されましたので、私どもはRIからも「適切且妥当な国際奉仕活動」として評価されたものとうれしく思っております。米国のガバナーエレクト研修でもラタクルさんは同様の事をおっしゃったようですね。

現在はこの2580地区で生まれ、育ったロータリークリアラ

ンドプロジェクトを日本全国の活動に少しでも繋げて行こうと「地雷0日本ロータリー連絡会」を準備致しております。引き続きご支援をお願いいたします。

具体的な活動はどういう事をしているかと申しますと、英国の「HALO TRUST」(Hazardous Areas Life-support Organization)というNGOと契約して、現地で毎年5万坪づつ地雷を除去し、現地の自治体に引渡し、難民キャンプにいる元の村人を呼び戻し、定住させる運動をしております。このHALO TRUSTはスコットランドの元技術将校が立ち上げたNGOで6,000人規模で世界10ヶ所（カンボジアのほか、コソボ、アンゴラ、モザンビーク、エリトリア、アフガン等）で地雷撤去をしている専門家の組織です。（カンボジア政府と契約すると渡したお金がどこかに行ってしまう恐れがあるので英国のNGOと契約しているわけです）。初年度は機械設備など購入しましたので4,000万円ほどかかりましたが、2年度からは1年1,000万円で5万坪綺麗（クリア）になるのです。従って我々ロータリーの仕事は1年に1,000万集めて5万坪づつ綺麗にして、村人を再定住させるわけです。今年の2月までの5年間の実績は次の通りです。

クリアした村：30数ヶ所、10数か村

再定住した家族：575家族

クリアした地域：住宅地（小屋）、農耕地、道路、学校、井戸周辺等

クリアした面積：約86万平米（約26万坪）

費用：9,000万円（通算6年、初年度4千万、以後年1千万）
（その別に05-06年度は東京クラブが独自に国際ロータリー100周年記念事業として1千万寄付して「東京クラブクリアランド」を実施した）

そして、毎年2月に現地の地雷原に行き、土地の引渡式出席（国際ロータリー2580地区標識の除幕されるとうれしいものです）、除去作業の視察、小学校訪問（子供達へお土産手交）、村民との交流、HALO TRUSTとの契約更新締結をしてくるわけです。地雷原には軍のヘリで行くのですが、現場では、我々も防弾チョッキや鉄兜、顔当てをつけるのです（相当重いですよ）。5万坪といっても全部綺麗に出来るわけではないので、人の住む小屋、学校周辺、道路、農耕地、井戸の周りぐらいで、あとは危険を示す赤杭（立ち入り禁止）だらけであります（ゴルフの杭と違い、踏ん

じゃったら手足をぶっ飛ばされるのですから大変です)。村人はその狭い中で生活するのですから、日本では想像も出来ません。トイレは小屋にはありませんから外でやるのですが、人から見えないやぶの中、森の中は赤杭地域ですから、大きい方も人前でやらざるをえないのです。それでも村人は故郷に帰り農業が出来るようになったと喜んで、感謝してくれるのです。子供達は片手、片足で狭いところを嬉々として飛びまわっているのです。カンボジアはもともとサッカーの盛んな国ですが、地雷原の子供達はボール遊びは出来ないのです。ボールを蹴れば赤杭の中に入ってしまうし、子供ですから追っかけて自分も入ってしまう。

(写真取るとき後ろに下がらない)。そういう子供に文房具やリュック、お菓子を配ると目を耀かせて喜ぶ姿は正に感動です。三重のロータリアン(小野P G)が視察に参加して車椅子100台寄付したのですが、中古品を部品を取り替えて新品同様にしても1台1万円で出来るそうです。これで百人の人の足が出来るのです。他にも日本やヨーロッパ、アメリカのロータリークラブから義足や儀手が続々送られています。

地雷除去のやり方は依然としてひとつ、ひとつ取って行くのですが、最初は「何でこのハイテクの時代に一度に大量処理出来ないものか、日本の開発した高度な探知機やロボットを使ってやれないのだろうか」と思ったのです。しかし現地に行ってみるとよく分かるのです。正に「百聞一見にしかず」です。灌木の森や林、人の住む小屋が点在する(日本はどんな山村でも人家は一箇所に集まるが、カンボジアはあっちに一軒、こっちに一軒と点在し、見渡せない)、場所によっては平地などほとんどなく、山、坂、谷、で段差の連続、背丈を越えるブッシュ、(戦後25年)、人道目的である以上取りこぼしは許されない(軍事目的なら多少の取りこぼしがあっても名誉の戦死か負傷ですむかも知れませんが)、といった状況でとても同時大量処理など出来ず、大きな機械も持ち込めず、ロボットなどは置いただけで動かなくなるというのが実情でした。空中で破裂させて、空圧で地下の地雷が大量に誘発爆破されるという方法もありますが、それには人を全員どかさなければなりません。村長さんの命令で村人全員が避難出来るのは先進国の話で、戦争で小学校にもいけなかったカンボジア人は社会的訓練も受けてないので、“命令いっか”の統一行動が難しく、誰かが残ってしまうのです。人が残っているとところへ“ボン”とやったら大変なことになる。又カンボジアの地雷はロシア製、中国製のものが多く大量爆破には反応しにくく出来ているそうです。又大量処理が出来たとしても処理率は50%ですから、そのあと又探知機でチェックしなければならず、爆破による金属片が散らばっているので探知機がどんどん反応して、なりっぱなしになり、收拾がつかなくなるのです。最近の地雷は知能的で敵の戦車には反応するが、味方の戦車には反応しないというのも出来てきているそうです。探知機に反応しても、くぎや、ピンのふた、金属片にも反応するので、場所によって

は2~300回に1回しか地雷にあたらないという確率だそうです。それでも反応すれば掘らなければならず、掘るにはブッシュを刈って土を出し、横から棒を差し込んでそうっと手で掘るわけですから作業員1人が一日に掘り進める距離は20メートル程度だそうです。それを繰り返し、掘り起こして進んで行くのですから、世界で推定1億個ある地雷をいまの技術で処理するには500年かかるそうです。日本の高度なハイテク探知機は映像が出るので、これは地雷、これは違う、と分かり場所も深さも分かるのですが、誰も使っていない。ハイテク過ぎてカンボジアの作業員には扱えないのです。値段も高く、壊れても直せない、部品もないというので専らただ音が鳴るだけのドイツやオーストラリア製の単純な機械を使っています。

カンボジアは今や大人の事故は少ないのですが、今やられているのは主に子供と家畜です。昨年行きました時には夕食中に子供が3人やられたという緊急連絡が入り、HALOTRUSTはすぐヘリを手配しました。

除去作業は危険な仕事ですが、給料が警官並によく月100ドルぐらいですから希望者が多く雇用開発にもなっています。

更に問題は今世界で1年間に処理する地雷の数より、新たに埋められる地雷の数に方が多いことです。カンボジアでは取り出すだけですから、あと5年ぐらいで取り終わる目途が立っているのですが、イラク、アフガン、アフリカ諸国、北朝鮮等では依然として埋められています。国連の対地雷禁止条約を批准した国は3分の2で、日本は批准して爆破し、保有地雷はもうありませんが、アメリカ、ロシア、中国、韓国、北朝鮮などは自国防衛上必要な武器として反対しています。地雷は非常に安く、ひとつ3~500円(中には150円)ですから紛争国でも買えるし、買う国があれば売る国がある、造る国があるという“いたちごっこ”というのが現実です。国連加盟国は戦争が終わったら地雷を埋めた場所、数等を報告する義務があるのですが、守る国はありません。捕虜虐待だつてジュネーブ条約は今でも生きているのですがイラクの米軍を見ても分かるとおりに守ろうという気もない、ジュネーブ条約さえ知らない指揮官が多いでしょう。いまの戦争とはそういうものでしょう。社会に社会倫理、企業に企業倫理、経営に経営倫理、政治に政治倫理。スポーツにスポーツ倫理が薄くなってきている現実を見れば、特に戦争には倫理や正義などはないのが当然かもしれませぬ。ベトナムで戦争記念館(ベトナムではアメリカ戦争という)に行きますと切り落としたベトコンの首を並べて米兵が一杯やりながら談笑している写真や、ヘリから捕虜を突き落としている写真があったり(女捕虜の話)、それでもベトコンの捕虜はトンネルの中身を吐かなかつたので、トンネルのあることは分かっても中がどうなっているかは米軍には最後まで分からなかつたようです。トンネルは北から南に250キロも続いていたのです。私も入って見ましたが居間あり。寝室あり、作戦室あり、貯蔵庫ありで250キロあるのです。又いたるところに落とし穴

があり、落ちると槍に刺るので、米軍は怖くて森の中を歩けなかったそうです。超近代兵器が忍者の武器に負けたということでしょう。

カンボジアではプノンペンのポルポト記念館に行きますと、ポルポト軍が女、子供を含むインテリ市民と家族2~300万を虐殺した時のやり方が写真と画でよく説明されていますが、ひどいもんです。大きな穴を掘りその周りに市民を裸にして座らせ後頭部を棍棒で殴り殺すのです。とさつです。穴の中に落ちますがまだ死なない者は刺し殺し、そのまま穴を埋めてしまうという、まことに残虐極まりないやり方です。それを15~6の少年兵にやらせるのです。宮廷ダンサー300人の内2人だけ逃げて生き残ったのですが、女性は裸にしてベッドの枠にくくりつけ乳首をさそりに食わせるというめっちゃくちゃな状況だったことがよく説明してあります。記念館に入るときは皆話しながら入りますが、出てくる時は黙ったままです。

実は正直に申し上げて最初は私も地雷除去運動はよく分かっていなかった。「まあダイアナさんのような有名人が政治的PRのためやっているのだろう」ぐらいにしか考えていなかったのです。ですからカウンセラーの徳増PGには「村瀬君は始めは反対だったが現場に行ったら一遍に賛成になった」とよく言われますが、反対とまでは行きません。まあ関心が薄かったのです。しかし現実に現場に行って今お話したような実態を見て、同時に日本のいまの平和な状況を考えると「我々一般人も出来るだけの支援をしなければならぬ」という気持ちが強く沸いてきたのです。そして2580地区のこのプロジェクトはなんとしても成功させなければならない」更に「2580地区の皆さんが立ち上げたこのプロジェクトを日本全体のロータリープロジェクトに行きたい」という思いも強くなっていったのです。

勿論このプロジェクトに疑問を持つ方もおられるわけですが、私も最初は疑問視してましたのでそのお気持ちはよく分かります。次のようなご質問をよくお受けします。

1) 「地雷除去は政治的なこと、ロータリーにはそぐわない」

現に戦争をしているところではそうでしょうが、既に戦争が終って25年も経っている地域では純粋な人道目的といえるのではないのでしょうか。戦後25年経つ今でも1日4~5人のカンボジア人が地雷で亡くなっているのです。

2) 「造ることを止めさせなければいくら除去しても意味がない(いたちごっこ)」

だからといって誰もやらなかったらどうなるのだろうか。造り、売ることも止めさせたいが、それぞれ政治的なことでロータリーには出来ない。だから戦争が終ったところだけをやるわけです。

3) 「埋めた国、造った国がやるべきだ。カンボジアなどは内戦だからカンボジア政府がやるべきで、関係のない日本が金を出してやるのは筋が通らない。中国の細菌処理などは日本の責任だからその方をやるべきだ」

誰が何処に埋めたか分からないのが現実、べき論、筋論でなく出来る人がやったらよいではないだろうか。地雷除去は理論や理屈ではなくもっと現実的な人命を救うという人道上の問題。中国の細菌は極度に政治が絡むので手が出せない。

4) 「一番責任のあるアメリカが何もやらず、日本がやるのはおかしい」

これは誤解でアメリカはベトナムで戦争をしたので、カンボジアではほとんどタッチしていない。プノンペンに短期間駐留したが戦争はしていない。しかしながらアメリカは地雷処理ではカンボジアで官民ともに一番多く人と金を出している。日本の10倍。

5) 「なぜ地雷か、他にもいろいろあるではないか」
学校を作る、識字率の向上を図る、水の保全のため井戸を掘る、生活の改善のため農業を発展させる、これら全て地雷を取らなければ出来ないのです。全てをやるわけには行かないのでアジアで命にかかわる切実な問題、そしてカンボジアの国民経済の発展の根本となる地雷除去を選んでよいと思う。

6) 「寄付、寄付でお金がかかり会員がうんざりしている」

地雷除去は人頭割の強制でなく、会員個人の意思でポケットの中の小銭を入れるだけで大勢のカンボジア人が救われる。5千円、1万円と取られていくと痛いですが、小銭なのであまり痛みを感じないで奉仕が出来る。

繰り返しになりますが要するに地雷除去は理論や哲学ではなく、より現実的な、より単純な「人命を救う」という人道上の問題なのです。

不思議なことに地雷処理というのは現場に行く度に“目から鱗が落ちる”ようによく分からなかったことが分かり、新しい反省と思いが生まれるものです。その例を上げると三度目の参加で次の2つがやっと分かったのです。第1は「地雷除去は何平米綺麗にしたかではなく何人の命を救ったか」ということです。

HALO TRUSTの標語も「To remove one mine, to save one life」ですがこの意味がやっとわかりました。いままではつい何平米というように面積を実績として考えてしまうのです。この感覚を理解するには我々には時間がかかります。地雷を0にすることは出来ないが、被害者を0にすることは出来るのです。

第2は「べき論」です。私も地雷処理は「べき論」ではないと言いながら、心の中では「べき論」にこだわっていたのです。そしてそれに気が付いていなかった。例えば、軍のヘリで地雷原に行くのですが軍にチャーター料を払う。カンボジアのために地雷を取りに行くのだから、ヘリぐらい提供すべきではないか、それが当然だといつも思いました。それが今回、べき論にこだわらなければ「いいじゃないか運賃を取る事情もあるのだろう。払えるのだからこちらで払おう。出来るものがやればよいだろう」という気持ちになるなということに気が付いたのです。出来ない人は

夫々事情があるのだろう、出来る人がやればよい、これが奉仕だということです。べき論にこだわっているうちは“だれだれのためにやってやるんだ”という“恩着せ”であり、それでは「行動は奉仕でも、心は奉仕でなく援助だな」ということです。恩着がなくなって始めて奉仕になるのだなということがなんとなく分ってきました。そういえば福沢諭吉の教えに「世の中で一番尊いことは人のために奉仕して恩に着せないことである」というのがあるのを思い出しました。

実はカンボジアのホテルで日本の観光客が我々に気づかず「ロータリーって地雷取ってんだって。いいことしてるじゃない」と話しているのを聞いた時本当にうれしく疲れがすっ飛びました。“これが奉仕の理想かな”など思ったりしました。最近世間一般から“金持ちの昼飯会”とか“大人の幼稚園”ぐらいにしか思われていないロータリーの現実を考え、100周年を機に改革を進め、誤解を解いて行くにはこういう顔の見える国際奉仕のプロジェクトは必要であり、ある程度長期にやって行くことが大事なんだ

なと思っております。HALO TRUSTも「大概の援助団体は1回小切手を送ってくるだけで“はい、さよなら”が多いが、ロータリーは長期に続けてくれて毎年来てくれて現場をみしてくれる。これはほんとに有難いし、心が通う。自分達もカンボジア人もやる気が出る」と言っていました。

私がカンボジアに行くたびに思い出すのが孟子の「春秋に義戦なし」という言葉です。孔子の書いた歴史書「春秋」（五経のひとつ）に500に余る戦の話が出て来るが、どれをとっても正義に戦い（義戦）などないという意味だそうですが、2,000年経った今の戦争にも当てはまりそうですね。時間でございますのでこれで終らせていただきますが、今後とも2580地区の地雷除去奉仕「ロータリー クリアランド プロジェクト」をご支援いただき、こちらのクラブでもYELLOW BOXを是非毎週例会で回していただきポケットのチャリン、チャリンを入れていただきたいのです。それでカンボジアの子供達の命や手、足が救われるのです。百円募金に倍旧のご協力をお願い申し上げます。